

豊富な問題を提起したコンパクトな理論書

—竹内真一さんの遺著 『労働組合運動の可能性 —史的考察をふまえて—』 を読む

小林 宏康

著者は、階級論をふまえた青年研究に多くの実績をもつが、退職を機会に研究テーマを「労働者の団結の歩みと現状」に定めた。本書はその最初で最後の著書である。A5判140ページのコンパクトな本だが、労働運動が直面する主要な組織問題がほぼ網羅されている。筆者が健康であれば数倍の著作となっただろう、そう思わせるだけの豊かさをもつ理論書である。「日本の労働組合と労使関係研究は理論モデルの改善と深化を必要としている。そうした仕事をこれからの喜びとして、健康と相談の上で、年相応にゆっくり進みたい」と書いた筆者だが、仕上げの段階での急逝がその時間を奪った。「私の学習ノート」（あとがき）という性格から、筆者が「理論モデル」のどこをどう改善・深化しようと考えていたのかは明示的には記述されない。が、随所にそれを推測する手掛かりは埋め込まれている。掘り起こす仕事は残されたものにゆだねられた。私の力量による誤読を恐れず「勝手読み」のほんの一端を紹介する。「追悼を兼ねた紹介」が注文だったが、あえて追悼に類することは省いた。本書の理論問題への貢献を可能な限り明らかにしたかったからである。

本書を貫くのは、2つの世紀を越えヨーロッパから全世界へと大衆的すそ野をひろげつつ発

展する労働組合の歩みを鳥瞰することによって、労働組合研究の鍵概念を再定義しようという意図である。第一章では「労働組合とはなにか」が、歴史的発展のなかで、労働組合の活動範囲、役割や機能の拡大・豊富化の反映として示される。ウェッブ夫妻の周知の定義と1920年版での運動の発展を反映した記述、最近のILO文書での労使関係の定義などが参照され、マルクスの「過去、現在、未来」が、労働組合運動の合法的把握によって、その未来・今日の姿を先取りしたものとして提示・解説される。また、第二章では、同様の方法で、「職業別組合」から「産業別労働組合」への組織形態における発展がイギリスとドイツを例に考察される。「産業別労働組合」の概念は、団結の基礎を職業的なものから階級的なものに移行させる手段として、国による階級闘争のありようを刻印された歴史的具體性をもってとらえ返され、そこから「企業別組合が有力あるいは支配的な国では産業別組合の定義は別様であつてよい」という重要な指摘が導き出される。

歴史を鳥瞰するさい、筆者が強く意識したと思われるのは次の3点である。

その1は、歴史研究における欧米への偏り、団結の世界像における南半球の欠落である。そこを埋める仕事に「残された短い時間を」あてたいと筆者は書く。労使関係の「三層システム」論による労使関係の3類型に触れた個所では、「③企業・事業所レベルを基礎に分権化した交渉方式が支配的な制度」では、組合は企業を基礎に組織されているが、それはアジア等に広くみられる形態であるとし、「日本モデルの波及力を含め、③の類型の研究はまだこれから」としつつ、いくつかの重要な指摘をしている（第五章）。労働組合の組織形態は労働力市場をめぐる階級間の抗争が条件づけるという視点から「日本の企業別組合」を論じた第六章とあわせて、実践的見地からも多くの示唆をえた。「企業別組合」を日本特有のものとし、欧米モデルに照らして功罪を

新刊紹介

論ずる議論はもう卒業すべきだろう。

その2は、旧ソ連型「マルクス・レーニン主義」労働組合論の克服である。「『危機の二〇年』——分裂、協調、統一——」の標題をもつ第四章はその意味で本書の圧巻といえる。労働者の最上層を労働者全体から切りはなして一つの社会層にくくり、「本来のプロレタリアート」に対立させるレーニンの「労働貴族論」の構図は、レーニンのネップへの政策転換、国際的には統一戦線の提唱において訂正され、30年代の人民戦線の時期、第2次大戦直後の世界労連結成の際には清算されたかにみえたが、その後も国際労働運動の分裂を持続させるという禍根を残したと筆者は見る。内容に立ち入る余裕はないが、労働組合の諸潮流についての把握（「純粋な組合主義」と「協調主義」、「労使協調」と「労使一体」の区別と関連等）、「団交権の実効的承認」と「労使協力」の諸制度（労使関係の二元制、従業員参加・共同決定、産業民主主義等）などについての説明は、この点での筆者の探求と深

くかかわるだろう。

第2点ともかかわって3つ目に、社会学、経営学の実証研究の成果に対する階級論の立場からの幅広い目配りをあげたい。団結の再生を展望する第七章では、「階級死滅論」の流れを引き、団結の未来に悲観的な論調の多い労使関係研究のなかに、新自由主義の破綻——組合再活性化の動きの反映（「階層論の動揺」）を指摘する。そこに筆者は、「個々の階層やグループではなく、労働者階級の総体」が動きだす予兆、労働組合運動の転機を見ている。

付記：金田豊氏の同書評を読んだ（『学習の友』2010年2月号）。本書の主要な議論を分かりやすく簡潔に提示した優れた論考である。本稿の執筆では可能な限り重複を避けた。併読願えればと思う。

（2009年8月・学習の友社・1500円）

（こばやし ひろやす・常任理事）